

高橋和巳論(三)

—— 中国文学論の一端 ——

安東 諒

八

高橋の卒業論文「『文心雕龍』文学論の基礎概念の検討」に筆を進めるに当たり「文心雕龍」という書について少しく説明しておきたい。本書は上下篇各二五篇の五〇篇から成る文学評論の理論書である。とは言っても当時(五〇〇年ごろ)は、現代のように創作と批評(評論)の分野が截然と区別されて考えられていたわけではない。文学評論(文章批評)の理論を推し進めていけば、それは当然、創作論の機微に触れざるを得なくなる。創作時の作家の内面の心象と創作対象との関係(形象思维)の機微を論理的に説明しえねば、いかなる評論も印象批評の域を出ることはない。

下篇冒頭の神思篇は、その解明に費された一篇であった。劉勰が本書を著す以前にも魏晉以来、文学評論の書はあった。彼の念頭にあった諸書は序志篇の自述に依れば、魏の曹丕の「典論」中の論文、弟曹植の書翰、応瑒の「文論」、晋の陸機の「文

賦」、摯虞の「文章流別志論」、李充の「翰林論」等である。これらの論書に対する劉勰の不満は次のような点にあった。「各照隙隙、鮮觀衢路」「並未能振葉以尋根、觀瀾而索源」つまり各論は部分論としては認めうるが総合的視点が無いということ、また末端と表層を眺観しているだけで根源化への方法論がないということであろう。前掲諸論のうち、曹丕、曹植、陸機の作品は、梁の昭明太子蕭統の編纂した「文選」に採られて、現在それを読むことができる。それらは確かに部分論ではあるが、陸機の「文賦」が劉勰の「文心雕龍」に与えた影響は、何人かの研究者が指摘する如く少なくない。摯虞と李充の論は嚴可均輯の「全三国晋文」に佚文が若干採られているが、その全貌は窺いえない。応瑒の「文論」は専論としてのものがあつたかどうかは定かでない。「芸文類聚」に「文質論」なるものが採られているが、これは文に関わる論でないことは、范文瀾が「文心雕龍注」で指摘しているとおりである。またこれら以外にも当時に文論があつたことは、香港の中文大学教授饒宗頤の

「劉勰以前及其同時之文論佚書考」——六朝文論摭佚——から知ることが出来る。参考の為に項目だけでも引いておこう。「文檢六卷」「傅祇文章駁論」「荀勗雜錄文章家集叙十卷」「郭象碑論十二篇」「摯虞文章流別志論二卷」「李充翰林論三卷」「顧愷之晋文章記」「張防四代文章記」「張師「摘句」「顏延之庭詰」「王微鴻宝」「張率文衡十卷」「明克讓文類四卷」「徐乾文筆駁論十卷」「文章義府三十卷」「杜正藏文軌二十卷」「饒宗頤が言っているように中には類書と紛らわしいものも有り定かでないが、一応の目安として挙げた。

華儷な四六駢儷文が盛行を極め、音韻上においても沈約らによつて平上去入の四声平仄が発見され、文章文体に対する関心が高まったのが六朝時代であつたことからすれば、文論の多産も故なしとしない。それらの中にあつて「体大而慮周」と評された「文心雕龍」は、空前絶後の作として中国文論史に一頭地を抜く存在であつた。それでは、その構成や内容は一体どのようなものであつたのか？

「蓋文心之作也、本乎道、師乎聖、体乎經、酌乎緯、變乎騷、文之樞紐、亦云極矣、若乃論文、叙筆、則面別区分、原始以表末、積名以章義、選文以定篇、數理以拳統、上篇以上、綱領明矣、至於割(剖)情析采、籠圈条貫、摛神性、鬪風勢、苞會通、閱声字、崇替於時序、褒貶於才略、招悵於知音、耿介於程器、長懷序志、以馭群篇、下篇以下、毛目顯矣」と序志篇に本書の大梗が述べられている。

一読しても直ぐには大要を把み難く見えるが、文章構成は整

然としている。上篇二五篇の冒頭五篇、原道、徵聖、宗經、正緯、弁騷篇は文心論(文章の核論)であり、文章の樞紐(關鍵)が説述されており、続く明詩篇より書記篇に至るまでの二〇篇は文筆論(有韻と無韻の文体論)であり、文章の綱領(大綱)が説述されている。下篇二五篇の神思篇より序志篇に至るまでの篇は情采論(文章の内容と形式論)であり、文章の毛目(細目)が説述されている。文章の創作と批評の方法論が下篇には述べられている。中国で文体という語は文筆の語からも推察できるように文章の種類、様式のこと、ジャンルであつてスタイルではない。

次に作者である劉勰についても少しく触れておきたい。彼の本伝は「梁書」「南史」に有るが、詳知するには龍学の校勘考証の大家である楊明照の力作「梁書劉勰伝箋注」(「文心雕龍校注拾遺」所収)に拠るのが至当であろう。また近刊の牟世金の「劉勰年譜彙考」も有用である。前書がいかに緻密精細の考証の下に成立しているかを知るには、本書を実読願うしかないが、台湾の龍学を代表する師弟の二碩学の李曰剛と王更生が各自著「文心雕龍斟詮」と「文心雕龍讀本」の巻末にこの箋注をそのまま襲用していることからその精覈が窺える。(李曰剛の方は、「文心雕龍校注」所収の箋注)楊明照の本書は、白川静の「字訓」「字統」を読む時のような楽しさがある。(「知の楽しさ」というか(完璧な知性)への戦きとつかまたこわ(畏)いものである。例の深度と広さは楽しくかつまたこわ(畏)いものである。例を示そう。「家貧不婚娶」という一句が本伝にある。この五文

字をごくふつうに考えれば「家が貧しかったので結婚しなかった」となるだろう。

楊明照は、そのように表面的な俗考をしない。この句の前句「總早孤、篤志好學」と睨み合せて次のように考える「按舍人早孤而能篤志好學、其衣食未至空乏、已可概見。而史猶稱為貧者、蓋以其家道中落、又早喪父、生生所資、大不如昔耳。非即家徒壁立、無以為生也。如謂因家貧、致不能婚娶、則更悖矣、無徵不信、試拳史実明之」思うに劉總は、早く父を失いながらも學問に精進しえたのは、衣食に事欠く程ではなかったことがわかる。なのに史書に貧乏と書いているのは、家が中途で没落してしまい、また早くに父が亡くなったので、日常の費用が以前ほどではなくなつたと言っているだけである。赤貧にして生活できないというのではない。もし家が貧しかったので嫁を貰えなかつたなどと解するなら、それは違う。この論証に史実がなく信じないというなら、例を挙げて明証しよう。」と。かくて彼は「宋書」「南齊書」「梁書」から四名の本伝を引きこよう言う「彼四人者、皆非寒素。其不婚娶、固非為貧也。而謂舍人之不婚娶、純由家貧、可乎？ 或又以居母喪為說、亦復非是。因三年之喪後、仍未婚娶也」「この四人は素寒貧ではない。なのに結婚しなかつたのは、もとより貧しかったわけではない。であれば劉總が結婚しなかつたのは、貧乏だけの理由だと言えらうか。母の喪に服したからだという説があるが、これもまた正しくない。三年の服喪期間が明けてもなお結婚していないのだから」それでは劉總はなぜ結婚しなかつたのだろうか？

ということになる「然則舍人之不婚娶者、必別有故、一言以蔽之、曰信仏」と。それは只一言、仏教信仰のためだ」と楊明照は結論する。その例証を彼はまた次に挙げてくる。劉總の不婚の事実が何の故だったのかは、現代にあつては誰にも解りはない。しかし、楊明照の博引傍証には説得力がある。學問研究に於ける実証學の醍醐味がある。白川靜の學にも同様の背景があり、脊柱がまっすぐ通っている。無徵不信の者があれば、前掲二書に就いて〈道〉〈徳〉の二字、〈みち〉と〈へのり〉の二語を披見してみるがよいだろう。〈道徳〉などという語がその根源にいかにも深く重い意味を蔵していたかを思い知らされるであろう。

傍道に外れたが、本伝によつて劉總の生涯を簡述する。「當時の高僧であつた僧祐の下へ身を寄せること十余年、仏典の經藏律藏に博通した。任官後、昭明太子の愛接をえた。『文心雕龍』五十篇を著し、古今の文体を論じた。その書が完成しても世人の稱讚をえなかつたので、時の政界文壇の大御所であつた沈約にその評定を願おうとしたが、伝手が無く、彼は自らその本を持って沈約の所へ行き、その外出の車を待ち、直接お願いした。その姿は物売りのようであつた。沈約はすぐにその本を受けとり読んで大いにこれを重んじた。その本が深く〈文理〉を得ているとして常に彼の坐右に置いた。劉總はまた〈仏理〉にも長じた名文章家でもあり、時の都の寺塔や名僧の碑誌の文章も依頼されて書いた。勅命によつて慧震と共に定林寺で仏典の編纂をした。それが終わつて出家得度し、名を慧地と改め、それか

ら一年もせず入寂した」

劉勰の生卒年は諸説あり定まらないが、牟世金の前掲『劉勰年譜彙考』によって泰始三年（四六七）丁未に生まれ普通三年（五三二）壬寅に五六歳で卒したという年説を引いておく。

九

「劉勰『文心雕龍』文学論の基礎概念の検討」は、これよりほぼ十年後に書かれた「六朝美文論」と併読されるのが望ましい。「この論文（前記のもの）は高橋の中国文学の論文としては『六朝美文論』と並び出色のものと思われるが、門外漢の私にしてなお二十二歳でこれだけの文章が書かれた意味の大きさはわかる。高橋が学者となる道のはじまりはこの論文を書いたことでいわば保証されたといえる」と川西正明は「評伝高橋和巳」に記している。卒論と「六朝美文論」が、高橋の中国文学論としては出色のものであると思われる、という川西の指摘は、筆者も当を得ていると思う。通史的に広い視野から論述されているからそう思えるという点を除いても、この二作は確かに力作であろう。だが「六朝美文論」には、卒論ほどの凝縮された緊張感希薄であるように思える。年齢を重ね知識が増えた故のゆとりとだけは考えられないゆるみを筆者は感じる。卒論には二二歳の気負いとともて時を十分に費やした末の整育がある。若年にしては不思議とさえ思える老成がある。それを才能というのかもしれないが、高橋には出発の地点で既に終着を見据えるような天性の才が有ったのかもしれない。「悲の器」に

もそういう雰囲気を感じとれるのだが。

高橋には「文心雕龍」以前の中国古典文学理論」という短文がある。拙稿(一)に既に紹介した「中国古典文学理論——その二つの側面」の続篇なるものである。京大人文研の文学理論研究会の報告レジュメとして「文学理論」に発表されたものである。(『全集』第二十卷所収) そこにはもう二つのレジュメが続

挙されている。「劉勰『文心雕龍』の文学論」と「想像力の問題」である。想像力についてのまとまった論稿は書かれなかったの

であろうが、それは創作体験で実際に生かされたのであろう。

以上挙げた四篇はレジュメだから量はそれほどないが、これだけ内容の濃いレジュメというのもそうはないと思える。「想像力の問題」などは、その章節に肉付けがなされ論説が展開されていたなら相当に高度な哲学論文が仕上がっていたに違いない。「文心雕龍」以前の中国古典文学理論を四期に分け、(1)先秦文学圈 B C 一〇〇——B C 三〇〇 (2)漢代文学圈 B C 三〇〇——A D 三〇〇 (3)魏晋文学圈 A D 三〇〇——A D 四〇〇 (4)南朝文学圈 A D 五〇〇——A D 七〇〇とする。文学史に沿うたものである。(4)にはこうある。

「南中国の華麗温和な自然の中で、文人集団は貴族の保護のもとでサロン化し、自然内自我解放として文学をたのしむ気風、及びその理論づけが生まれる。一方仏教がインテリ社会に滲透し、玄論、すなわち仏教教義の哲学的解釈の盛行と、その講座の盛行があり、文学批評もいきおい集団討議的となる。集団討議的にアンソロジー（文選）が編纂され、ジャンルは確定、批

評基準も安定し、またインド言語学の影響で詩学も完成する（沈約・八病説）、鍾嶸の詩品、劉勰の文心雕龍は、それぞれの体裁上及び文学論に個性をもちつつも、こうした雰囲気の中で、以上にのべた過去の諸傾向を貪欲にのみこんで完成されたものであるということができる」

「文心雕龍」が産み出された時代の背景が簡潔に述べられている。

南朝文学圏を論じる時、絶対に見落としてならないのは「自然」がいかに当時の文人たちに大きな影響を与えていたかという点であろう。東晋の渡江以来、索莫寒冷の北の自然とは異なる華麗温和な南の自然を見た文人たちの詩心の躍動は想像に難くない。三国、西晋の時代の詩は、東晋の玄言詩を通じて山水詩へと花開くのだが、ここには詩経以来の比興的用法としての自然が後退して、自然が自然そのものとして詩人たちの眼前に立ち顕われる。立ち顕われるだけではなく、その自然に魅せられ自然に己の存在を融けこませていく詩人さえ出現してくる。劉勰もまた「文心雕龍」で「自然」の文学における偉大さを高らかに歌い頌讃する。文章（文学）発生の根源を自然に原づける原道篇。文章創作の絡線の機微を自然を対象として位置づける神思篇。文章創作の素材の宝庫は自然だとする物色篇。原道・神思の両篇は、上下各篇の冒頭に位置する重要篇であることも故のないことではない。

自然の存在を対象前提としない文章（言葉、文学）の発生など劉勰には考えられなかったのである。人類がいかなる経過に

よってコトバを獲得したかは、本当の所、誰にも解りはしない。だからと言って根源をつきとめない理論など砂上の楼閣にすぎない。吉本隆明が、「言語にとつて美とはなにか」の第一章に「言語の本質」の章において従来の言語発生論と悪戦苦闘しているのは、彼は彼なりに彼の理論の根源をつきとめたいが為である。

高橋は劉勰の方法論についてこう記す。

「劉勰の方法はこのように（前掲の過去の諸批評論への評語）並びに未だよく葉を振いて以て根を尋ね、瀾を観て而して源を索むる能はず」を指す——筆者注「三論玄義」の、「源究めざる無きを以て、群異方めて息み、理尽くさざる無くして、玄道始めて通ず」を思いおこさしめる否定性を武器とした根源化への方法であった」（傍点は筆者）吉本学の方法論もその辺りにあると考えて良いだろう。

論理的に根源を追究することによって異説を消滅させて仏道を弘通させるという「三論玄義」の方法論が劉勰の方法論でもあった、と高橋は考えている。先の文に続けて高橋はまたこうも記す。

「そして、「文心雕龍」の基礎観念の複数性は、中道主義的折衷の乱用を負うよりも、根源掘りさげのために可能なかぎり先入見にとらわれまいとして精神と宇宙の根柢を形而上的に考察してたどりえた原理の相対性にあつたのである。彼の方法は仏教認識論体系をうみだした方法と共通し、彼の文学論の裏付けをなす形而上学は「周易」三論の系統を引く。そして、そ

の二元論の両極はたがい交流するものであったゆえに、あるときは循環論のかたちをとりあるときはまた弁証的でもあった」

『周易』なる書は、天地自然宇宙の根本的秩序法則を人界(人事)のそれと関連づけんとして創出されたもので、陰陽両爻の組み合わせに成る六四卦の卦爻は、抽象的形而上学ではあっても、それが一旦占断されて人事人界の吉凶を判断する時には、具象的形而下学となる。形而上学的道教と形而下学的儒教ともにこの書を両家がそれぞれの思想展開の根源に据えているのは、以上の理由に拠る。漢代に輸入され六朝時代に隆盛する仏教も、どちらかといえば形而上学的道教とその思考法は通底していたのだが、時の国家権力が儒教思想によって統治していたので、仏教を儒教的に改変する他はなかった。その改変の鍵を握る書もまた『周易』であった。そしてまた仏教原典が漢訳されるに当たっても、仏教經典中の抽象的論理的用語用法の拠り所は『周易』中の用語用法が多かった。『周易』は、正に中国の三大思想(儒・釈・道)を結節するに欠くべからざる重要な書であった。勿論劉勰は、その三教に相当深く通じた人であった。それを自分の理論創成に利用したことは、高橋の指摘を待つまでもないだろう。

一〇

「文之為徳也大矣、与天地並生者何哉」と壮大な疑問から『文心雕龍』は書き始められている。文章(文学)を追究するため

には、まずそもそも「文」とは一体何なのか?という根源追及が彼には必須であった。これが劉勰の根源化への方法論なのである。そして高橋の学問研究の方法論もそれであった。高橋が初めてこの一句を読んだ時の己自身との共感、心のふるえのようなものを味わったであろうことも、筆者には解りすぎるくらい解る気がする。「高橋は研究の第一歩において、個別具体的な作品論や作家論形式をとらず、普遍的原理論的な文学論の基礎概念の検討という作業を試みた。いわば彼の文学研究は、個々の臨床例から帰納して普遍的原理へと遡る方法によってではなく、研究をなりたさせる基本的な体系と価値基準をさぐり、その作業を通じて自らの獲得した批評の基礎概念を武器として個別例に対応せんとする演繹的方法とでもいふべきものによって、はじめられるのである」と中島みどり氏は「中国文学者としての高橋和巳」1原理論検討からの出発に記している。的確な指摘である。高橋が学生時代に熟読して震撼されたと告白している埴谷雄高もフッサールも劉勰も、実はその一点において結節連通していたであろう、とまでは言ってもまちがいではないと思う。埴谷が自己存在||自同律存在に執拗に拘わり、それと革命、宇宙と三語を連ねて自分の全仕事の内幕を自己分析していることまたフッサールほど自己意識の根源追及に心血を注いだ哲学者はかつてなかったであろうことに思いを馳せれば、高橋の方法論もおのずから浮かび上がってくる。劉勰もまた『文心雕龍』五〇篇中の大半の篇の書き出しをこの根源追及の演繹法によって始めていく。一例を挙げよう「古人云、形在江海之

上、心存魏闕之下、神思之謂也、文之思也、其神遠矣」と「莊子」の一文の美事な換骨奪胎の想像力についての根源的方法論がここにある。

「文の徳たるや大いなるかな。天地とともに並び生ずるは何ゆえぞや（高橋の訓読である。この大時代がかった訓読法に本書冒頭文に対する高橋のなみなみならぬ思い入れを見てとれる——筆者注）に始まる文心雕龍は、宇宙自然は本来美しく、それ故宇宙の精髓たる人間は本来、高度な美の創造の可能性をはらむという独特な理論でおしてゆく」（「文心雕龍」以前の中国古典文学論）独特ではあるがさして奇異ではない。南朝の文人たちが見た江南の自然美、また西洋圏はいさ知らず少なくとも東洋圏にあつて自然が美的存在であるという認識は奇異でないばかりか我々の国においても文学精神史を支える鍵語でさえある。歳時記には、その鍵語の具体例が満ち溢れている。文章（文学）の美の根源を自然の美に求めるのは理の当然とさえ言える。劉勰の論証をもう少し聞いてみよう。なぜ私たちが自然美に触発されて文章（文学）を産み出したのかを。

玄黄色雜 日月疊璧以垂麗天之象
夫 〱 方円体分 〱 山川煥綺以鋪理地之形 〱

此蓋道之文也。黒と黄の交色によつて天地が方円に分かれ、太陽と月は玉を重ねたように天の、山と川は絹布の模様のように地の形象を展開している。これこそが宇宙の根源を主宰する道の具象化の文彩Ⅱ美であると。天地が生じ、その間に人が参与して、人は天地の精霊の集まるところだから、天地と合わせて、

〈三才〉という。また人は五行の秀氣を享けているが故に天地とともに息づくいわば天地の心（臟）である。心が生まれれば当然言葉が起ころ。言葉が起これば当然その言葉が文章となる。これは理の必然であると。「故両儀（天地）既生矣、惟人參之、性靈所鍾、是謂三才、為五行之秀、実天地之心、心生而言立、言立而文明、自然之道也」はその原文である。

〈文↓心↓言↓文章〉という一連の必然式が劉勰の考えた文章発生の構図であつた。彼の国ではこの論を一時は客観唯心論と称び、自然美が人為美を創出したものであるとも言つた。この論を素材粗雑に過ぎると現代人が考えようとも、生命と言語の発生の根源さえ確知していない我々は、五〇〇年ごろの中国の一文人の文章発生の仮説に耳を傾けるしかないであろう。むしろ人類の美的感性による文章表現という芸術様式が自然美に触発され学育されたと考えること自体、現代にあつてもなお的外れの発想でないことは承認しても良いのではないだろうか。そしてもう一言付け加えれば、この発想は美しいし夢がある。高橋の緻密なまとめをもついでに見ておきたい。

「劉勰はまず、宇宙の性霊のもつとも秀れた凝集体が人間であるという前提から、自然の（理）のあらわれである山川の美と、人間の想像力の産物たる文章の壮麗を、同等に（自然なもの）と認定するところから出発する……宇宙自然のエッセンスが人であるゆえにまた、人間の諸感情の原野は自然にあると考えている」（劉勰『文心雕龍』の文学論）これを卒論の方の文章から補足すればこうなる。

「さて『文心雕龍』文学論の基盤である原道の概念はどういう理論をへて導きだされたのかをまずあきらかにしなければならぬ。原道は具体的文芸史や実際の作品批評の検討から樹立されたものであるかという点、（無関係ではないが）そうではなかった。それは既存の形而上学（人は性靈の鍾まる所↓天地人の三才、五行之秀などを指すものと思える——筆者注）にそいつ先験論的に指定されたものである。劉勰にあつては人間はまず自然的存在としてとらえられねばならなかった。人間の性、喜怒哀楽の感情の原野は自然であり、自然と宇宙に遍在する性靈のもつとも精妙な凝固体が人間であると彼はみたのである」少し長くなるがもう少し高橋流の劉勰理解を聞こう。

「外界の秩序が主体の理性の活力の源泉であるということは、いい換えればちやうど人間の自我自覚が他者の自我を感知することにより成立するように、類としての意識総体が（人類精神が）つねに経験原野としての自然と対照することの自覚にほかならない。たとえば、まず適応的存在である人間にとつては、そこに樹があるということは、われわれが存在するということであり、樹の姿勢が美しいという意義づけは、客体と志向性、所与と能作との統一を意味する。そうした適応性が行為や表現を産みだす能動性へと転換される過程を、自然におこなわれる移行であるとしたことに、劉勰の性善説（と同時に楽天性）を讀みとることができる」

三つの文章を挙げた。その一つは、先に引いた「性靈所鍾、是謂三才、為五行之秀、実天地之心、心生」の高橋の解釈であ

る。もう少し簡単に言えば「人は天地の心であるから、天地自然の美に感応するのは必然だ」ということ。その二は、先掲の中島みどりの高橋和巳の学問研究の方法論の言葉を借りて言えば「原道篇の理論は、帰納的ではなく（無関係ではないが）——高橋の語）演繹的である」と考えているわけである。後半はその二に同じ。その三は、人は自然に対して適応性を持つ故、能動的に行為や表現を産出する。それは自然移行であり、そういう論の展開の仕方に劉勰の性善説と楽天性を見てとれる。唯物史観の中国の研究者の言葉で再言すれば、それを「客観的唯心論」ということは先述したとおりである。たしかに劉勰の考え方は楽天的でありすぎるように思える。しかし劉勰として文章発生の初源に全ての人間が、自然を対象としてたやすく文章表現をなしたと考えていたわけではない。感情の原野が広漠美麗に眼前に横たわっていても、それを眺めればすぐに筆を把りすらすらと文章に出来ないのは今も昔も変わりはないだろう。やはり初源においては選ばれた人材が必要だった。「故知道治聖以垂文、聖因文而明道」とはそういうことである。「故二知ル、道ハ聖ニ沿リテ以テ文ヲ垂レ、聖ハ文ニ因テ道ヲ明ラカニスルヲ」《道》と《聖》と《文》との関連を言う。自然の道（宇宙の原理、天地の理法と邦訳されている）は聖人によって文章化され、聖人は文章によって道を明らかにしている。真に道を文章に定着しえたのは聖人であった。その文章こそが後世に伝えられて残る儒教の經典である。原道篇に続けて微聖篇、宗経篇と配列されているのは、劉勰の以上の考え方に因る。

時代を画するほどの新しい考え方も、ある日不意に突如として誕生するわけではない。一つの新しい考え方が産み出されるには、その回りやそれ以前に無数のその考えと似通うもの存在を必用とする。高橋は、自然山水のたたずまいに鋭敏であった数人の詩人の名を挙げている。謝靈運、陶淵明、阮籍、嵇康、左思である。竹林の二人は例外としても他の三人は確かに自然山水と共に生きた詩人であった。「さて文章表現が人間にとつて必然的事態であることを劉勰はそれより繰返して主張するのであるが、しかしそれは表現というものが人間の内部思考の平坦な疏外であるとか、水の高さが低きに流れるような物質世界の因果律そのままの必然性という風に考えられていたのでは決してなかった……表現へと向かわない単なる情緒や感傷は、点滅してはかなく不安定であることの諦思のうえに立っているのである。このことが『文心雕龍』一篇の修辭学を支配する……個人の思惟が、思惟主体が消えても思惟が一個の内環として、あるいはそれが星のように光るためには、形式を必要とする。その点滅する精神を形相化された存在として恒久に存続せしめる最大の武器が、人間の想像力のうみ出したもつとも高貴な産物である「言語」である……彼の『文心雕龍』一篇の制作の意図も、孔子にならつて、解散し本を離れた文体を整備することにあった……人の言葉が人間性の必然によりて発せられ構成されたときのみ存在の価値をもつということであり、

人間性の普遍・必然とは道徳を意味する」

高橋は『文心雕龍』の理論を説明しながら、〈言語〉や〈道徳〉に対する己の信念と信頼を熟っぽく語っているのである。そういう言い方が高橋に対する礼を欠くならば高橋は『文心雕龍』という書から〈言語〉と〈道徳〉に関する深い啓示を享けているのだ、と言ひ換えても良い。「表現へと向かわない単なる情緒や感傷は、点滅してはかなく不安定である」という一文をそのまま読み過せば「それはそのとおりだろうよ」ということになるかもしれないが、彼の夫人たか子さんの「高橋和巳の思ひ出」の「作家の奥さん」に書かれている彼の誇大妄想狂（高橋が自分をそう言っていたと夫人は書いている）で夢想家であるのに少しも行動家（作品に仕上げること——筆者注）でない実態を知る者には、胸にこたえる。

情緒や感傷や妄想や夢想やが思惟想像を通して形象化され言語となり文字として定着し一作品となるまでの真の苦悩を知っている者こそが名ある詩人や作家であろう。中国の長い歴史上、皇帝から一文人に至るまで、後世に残る文書を重んじたのは、それが常に己の道徳律と密接に関つていたからである。

戦後日本のアメリカナイズされた社会風潮の中で道徳・倫理・信義・礼節は地に墜ちたが、高橋の精神形成にあつてこれらがいかに重要な位置を占めていたかは、彼の残した研究・評論・創作の至る所から窺い知ることができる。彼が大学闘争に荷担した要因は、彼も述べているようにソクラテス流の「論理の導く所」だったかもしれないが、実の所は、日常次元の信義

や礼節への固執にあつたであらうと筆者には思える。「憂鬱なる党派」の終末部、娼婦千代が主人公西村の死体を前に生前の西村が自分に対して言った言葉を回想するくだりがある。

「……………およそ、この世は生きるに値いしませんし、一人の人間が何を考えたところで、この世の中はどのようにもならず、どうにもならない制約が一ぱいあるんですけれど、しかしやはり人間には守らねばならぬ信義や礼儀というものがあります。それを守ることによって、多少は生き甲斐を感じることができなくもないんです。わかりますか?」

「……………信義や礼節は何もそれだけでは価値ではないけれども、凡人が人間らしく生きてゆくためには、やはりそれが必要なのであり、そして、百人に一人、千人に一人というような偉人は別として、凡人が礼節や信義を守るためには、やはり平和が必要なんです。まともな生活と安定した収入が必要なんです。神も仏もおそらく存在しないでしょうけれど、また完全な救済も解脱もなく、人間の悪や欲望は永遠に消えることはないでしょうけれども、ともかく凡人が、人のものを盗んだり、人を傷つけたり、やたらに姦淫したりしないですむ世の中ぐらひは、神仏の加護はなくても、なんとか人間だけの力で築けるはずなんです。わかりますか?……………」

引用文だけで甚だ恐縮だが「人の言葉が人間性の必然によりて発せられ構成されたときにのみ存在の価値をもつ……………人間性の普遍・必然とは道德を意味する」重い言葉だが、おそらく真実ではあらう。

「わかりますか? わかりますか?」と娼婦千代に鄭重に語りかける西村の愚鈍と純真を筆者はこの引用節から想像するが、それはまたどこか高橋の人格と重畳して哀しいほどに切なく映る。頭の中は、古今東西の哲学や思想や文学によって培った理性や理論で充満していたであらう高橋も、日常の行為の次元ではおそらく隣人への信義や礼節に必要以上に気を使つたであらうことが、彼の友人や先輩諸氏や教え子たちからの証言から理解できる。「生きて生活するとはそういうものだよ」とも思うが、彼はどこかいつも他人への配慮のしすぎがあるようにも思える。

恩師への敬愛ゆえの配慮、友人らへの一方的な友情と信頼の吐露、それが裏切られた時の憂鬱と絶望からの落涙と悲痛。教え子からさえその優柔不断を指摘されさえしている。

頭は理性で体は任侠世界に近いほどの情へののめり込み。日本の知識人が大学闘争なるものを知るところまで持ちつづけた自己矛盾を彼もまた存分に持つていた。かく書いている筆者自身もまたそれと似通う自己矛盾にいつも大きく引き裂かれていて自分を感じている。この日本的心情は、現代においては過去の遺物となりえたのかどうかは、筆者にもよくわからない。ただわかるのは、人は信義や礼節を欠いては生きてはゆけないということぐらいではないが、高橋の過剰な信義、礼節の人格によって創出された創作や評論や学問研究の世界は、もう再び日本の若者の間にその正当的位置を占めることは、これからののだろうか。(未完)

（あんど・まこと 総合科学部教授）
一九八九・一一・三一